

研究通信

刊会局学部三
究大
1月研塾學隆
1986年1月
社落義濟山
村事慶經高
港区三田2-15-4511
TEL 03(453) 4511

大会と渥美農業印象記

斎藤典生

大会の会場となる蒲郡市およびその周辺の土地を訪れるのは私にとって初めての経験であった。一〇月三〇日、午後二時の特急で水戸をたつた東、大和田両会員と私の三人は、途中豊橋で合流した桐原会員とともに七時半すぎに蒲郡駅に到着した。同時に出るはずだった送迎バスはすでなく、やむなくタクシーを利用して濃霧に包まれた夜の、急峻な（とその時は思えた）坂道をしばらく走って三河ハイツへ。一昨年私たちちは茨城県大子町の、それこそ文字通り山の懐に会場を設営したのだが、今回の会場が山の頂上に、それも眼下にはるか三河湾を眺望できる絶好の場所に設けられていることがわかったのは翌朝カーテンをあけてみてからであった。ともあれここに三泊し、大会一日目から三日目の農業視察までフルタイム参加できた。以下、そこでの印象を断片的ながらいくつか書きつらぬてみたい。

今大会での自由報告は例年よりも少ない二本であったが、ともに豊富な資料を駆使した興味深い内容であった。「母村と移住村の比較研究」といった視点から母村の伝統文化が与える影響をテーマとする鷹田会員の報告は、前々回大子の大会での報告に続くもので、今回はとくに祭紀組織に焦点を当てて団体入植村落と個別入植村落との比較から母村の影響度合を論じられた。門外漢の私には大変勉強になったが、母村から受ける影響の違いが村落構造なりあるいは

そこに住む人ひとの思考や行動様式の違いにどう結合するのかも知りたいところであった。こうひとつ、柄沢、黒柳両会員の報告は、インドネシアの中部ジャワに位置する二つの村落調査を素材にそこでの村落、生産、生活の構造を追求されたものである。短期間の調査にもかかわらず数々の興味をひく事実が示された。とくに農業技術の革新と旧来からの労働慣行との関わり、しかも両者の関わりは村落によって大きく異なる点、またイスラム教徒がほとんどだとう同地に独特の相続慣習の模様などが印象に残った。それにしても報告をきいて私などは考えてしまう。こうした調査研究の成果を、それでは一体どのようにして日本の村落研究に接続してゆけばよいのだろうか、と。

今大会の共通課題「土地利用秩序と村落の土地管理機能」をめぐつては、五人の方々が報告された。まず、数々の研究成果を生み出した舞台として有名な宮城県南郷町をとりあげ、明治町村制施行期から戦前昭和期の満州分村移民までの時期の土地をめぐる部落、地主、国家の対抗関係を検討し、昭和恐慌以降はもはや部落規模の結束は無理であって管理主体としては行政区の把握が強くなることを示された安孫子会員の報告。細谷会員は、戦時下の山形県庄内地方で実施された労働力不足対策としての水田の交換分割の事例を素材に、「国策」が浸透するなかで自小作上層を核とする部落が積極的に「国策」を受けとめ、生産力的対応を果たしている点を指摘された。川本会員は、様々な調査経験とともに解体寸前にあるムラを、生活を守る組織、土地保全の主体としてのきめ細かい類型化をつみ重ねながらもう一度考えねばならないと主張された。志摩半島の漁村に舞台を設定して漁場管理の変化という視点から共通課題に接近しよ

うとした中田会員は、管理主体としての漁協の地位低下とそれに代わって自治会が誕生し從来の漁協との間に機能分化しつつある状況を報告された。さいごにゲスト報告者の川畠氏は、石川県内の二つの村落の現状比較から等質な自作農による土地管理がもはやできなくなつており、したがつて合理的な土地利用は大規模借地農家の連合、生産組合の再編によつてこそ可能なのであり、そうした方向を考えることが課題だらうと述べられた。

以上いづれの報告も長年の研究蓄積のうえにたつて展開され、その論旨は明快でかつ説得的であるように思われた。だが討論の時間が少なかつたせいであろうか、設定した時代と調査地の上で各報告が導出したそれぞれの土地利用秩序と土地管理機能がそれではどのように相互に連続し合うのか、全体としてそこに貫徹する論理はどういうものなのか、についてはイメージすることができなかつた。可能なならば時代的には昭和二〇、三〇年代をカヴァーし、地帶的には畑作、山間地帯をも加える形で、次の大会も今回と同じ共通課題を設定されるよう希望する所以である。

さて最後に、今大会のもうひとつの大玉、渥美半島の農業視察についてもふれねばなるまい。一一月一日、近来珍しいといわれるほど的好天気に恵まれて総勢一四人は午前九時すぎに出発した。渥美農業は多様な類型によつて構成されているという前田、牧野会員からうけたレクチャーの内容を思い起しつつ、また渡辺、交野両会員のまるで渥美農業の「生き字句」とでも思えるような名ガイドに案内されて渥美半島をグルッと見学する。総合農政のモデル地域とか補助金づけ農業などといわれる渥美の農業地帯は田原町、赤羽根町、渥美町の三町から成るが、これらは全国市町村別の農業所得で上位

三位を占めるという。暖房用のスチール管が内部を走り、農業や水の散布はコンピューターによって制御される最新の施設園芸や見事に基盤整備の行届いた田畠を眼の当たりにし、八ヶタ農業（一千万円前後の粗収入）の実現に奔走した渥美町の河合伸夫さん（大正元年生れ）の熱っぽいお話を直に聞いたりすると、高い農業所得もありなんといった感じになってくる。だがガイド役の渡辺さん曰く、日本農業の先端をゆく渥美農業の裏面では農業による土壤汚染が地下水汚染にまで拡がり、生産者の健康障害が現実化するなかで有機農法を取り組む人も出てきているんだ、と。一日、渥美農業の様々な面を見聞したが、この一言は今でも忘れられない。予定のコースを終わって豊橋駅前に着いたのは三時半頃、名物のちくわとアルコールを携えて間もなく新幹線に乗り込み、豊橋をあとにした。

末尾になつたが、大会の運営並びにヴァラエティに富んだ農業視察の企画、準備に当たられた愛知大学の会員の皆様に心より御礼申し上げたい。